

成長なき時代の「成長物語」

—NHK「連続テレビ小説」にみる—

竹内 里欧

The Bildungsroman in a Stagnation Period: An Analysis of the Morning Drama Series by NHK

Rio TAKEUCHI

1. はじめに

NHKの「連続テレビ小説」（通称「朝ドラ」）は、1966年放映の『おはなはん』（第6作）を起点⁽¹⁾とし、女性の自立や成長⁽²⁾をテーマとした作品を多数生み出してきた。本稿⁽³⁾は、「朝ドラ」を素材に、現代日本社会における「成長物語」のあり方・機能について考える。分析の際、補助線とするのは、近代社会において典型的な「成長物語」として広く流通したビルドゥングスロマン⁽⁴⁾である。ビルドゥングスロマンは、J. W. ゲーテの『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に代表されるような、主人公の様々な経験や移動をととしての自己形成をモチーフとする物語である。様々な体験や周りの人間関係を通じての主人公の成長は、しばしば読者のロール・モデルともなり、作品と読者の間には、一種啓蒙的な関係性がみとめられる（登張 1964: 4）。しかし、ビルドゥングスロマンを支えた近代社会の制度・文化は、現在、様々なゆらぎをみせつつある。大塚英志は、『ロール・モデル』としての小説の書式が不成立になりつつある」（大塚 2005: 308）現代がはらむ問題について注意を喚起しているが、そのような時代においてなお存在する「成長物語」はどのような特徴をもっているのだろうか。また、どのように受けとめられているのだろうか。

2. 分析の視角・方法

分析の対象となる「朝ドラ」作品は、『あさが来た』（2015年下期放送 大森美香脚本）、『ひよっこ』（2017年上期放送 岡田恵和脚本）の二作品である。『あさが来た』は、明治・大正期に活躍した実業家広岡浅子（1849-1919）をモデルに、主人公あさが、周りの人々に支えられつつ、旧習を乗り越え、前向きに人生を切り開いて成長していく姿が描かれる。五代友厚を演じたディーン・フジオカのブームを巻き起こし、女性に人気が高い。『ひよっこ』は、高度経済成長期の東京と茨城を舞台に、失踪した父を探すために上京し、東京の工場や洋食店で働く主

人公谷田部みね子の成長・奮闘を描いている。ここで、この二つの作品を対象としたのは、「①両者ともに視聴率回復期⁽⁶⁾の『朝ドラ』であり、ともに20%以上の視聴率⁽⁶⁾を記録した、2010年代を代表する高視聴率作品であること」、「②『偉人』『あさが来た』/『非偉人』『ひよっこ』、実在のモデルあり(『あさが来た』)/実在のモデルなし(『ひよっこ』)というように、内容面に対照的な特徴をもつ作品であることから、『朝ドラ』の多様性をすくいあげる可能性が高まること」による。

本稿の構成は、「3. 『ひよっこ』『あさが来た』の描写の特徴」と「4. グループ・インタビューの分析」の二つからなる。「3. 『ひよっこ』『あさが来た』の描写の特徴」においては、「朝ドラ」における「成長」の描かれ方⁽⁷⁾に着目する。「4. グループ・インタビューの分析」においては、「朝ドラ」視聴者、特に、首都圏の若い女性に行ったグループ・インタビューをもとに、「朝ドラ」の受容の様相⁽⁸⁾に着目する。

なお、本稿は、「朝ドラ」について今まで筆者を含む研究グループが行ってきた質的・量的調査で得られた知見である、『朝ドラ』は現代の若い女性に、生き方モデルを提示する機能を果たしている(稲垣・佐々木・伊藤・椎名・花田・服部 2017)、「若者は視聴にあたって、『成長』を評価している」(稲垣・佐々木・伊藤・椎名・花田・服部 2017)(稲垣 2017)⁽⁹⁾を受け継ぐ形で行ったものである。

3. 『ひよっこ』『あさが来た』の描写の特徴

まず、『あさが来た』『ひよっこ』両作品について、「成長」の観点からみてみよう。特に、「2. 分析の視角・方法」で示した両作品の対照的な特徴——「偉人」(『あさが来た』)/「非偉人」(『ひよっこ』)、実在のモデルあり(『あさが来た』)/実在のモデルなし(『ひよっこ』)——に留意しつつみていく。以下では、順番が実際の放送順とは逆になるが、説明の便宜上、『ひよっこ』、そして次に、『あさが来た』について検討する。

3.1. 『ひよっこ』

3.1.1. 「普通の人」の物語

主人公谷田部みね子は、等身大の親しみやすい人物として造形されている。就職を友人に譲るエピソード、家族愛の強調、寮生活の描写等にみられるように、主人公は、自己中心的な野心や上昇志向、業績主義と反対の価値観をもち、周りの人間関係(家族、同僚、友人、恋人)を尊重する行動をとる。脚本を担当した岡田は、「みね子は、決して何か大きなことを成し遂げる人ではないし、特別な夢を持っているわけでもない。でも、働くことが大好きで、置かれた場所で頑張ることをいとわない。そういう子がちゃんと幸せになっていく姿を最後まで見届けていただけたらと思います。みね子が“普通”の人たちの代表選手として、見る方に勇気を与える存在になってくれたらうれしいですね。」と述べている(岡田 2017: 105)。

3.1.2. 実在のモデルなし

『ひよっこ』は、オリジナルストーリーであり、実在のモデルをもとにしていない。高度経済成長期の日本に実際にいたであろう多くの無名の人々について描かれているが、そのことにかんして、制作統括を担当した菓子浩は「今回は高度成長期を支えた名もなき人たちの物語。懸命に生きる姿を通し、『これは私の物語だ』と感じてほしい。」と述べている⁽¹⁰⁾。

3.1.3. 『ひよっこ』の「成長」観

周りの人々とかかわりの中で、東京で自立し成長していく主人公が描かれる。何らかの業績や成果をあげることも、「自由って何？」から「自由って、自分で選んでことでしょ。」という言葉の変化に象徴されるように、主人公が自分の価値観を確立することが重視される。主人公の変化・成長は、エリート大学生のプロポーズをことわる、ものおしせず自分の意見を主張する、仕事に自信をもって生き生きと働く、といった、(大事件ではなく)日常の中にある様々な小さなエピソードをとおして描かれる。

3.2. 『あさが来た』

3.2.1. 「偉人」の物語（ではあるが）

主人公あさのモデルは、明治・大正期に活躍し、銀行（加島銀行）や大学（日本女子大学校）設立にかかわった実業家広岡浅子であり、いわゆる「偉人」である。しかし、ドラマでは、実際の仕事状況の説明よりも人間関係（夫婦関係、姉妹関係など）に重きをおいて描いている。ドラマの進展につれて、視聴者の関心も、様々な事業をあさがどう成功させたかというものから、家族や仲間との人間関係の描き方へと移動している（二瓶 2016：11-12）。たとえば、ドラマの中で重要な役割を演じる五代について、五代があさを支援⁽¹¹⁾した経緯や理由はビジネスの観点からは描かれない⁽¹²⁾。

3.2.2. 実在のモデルあり（ではあるが）

実業家広岡浅子がモデルになったストーリーではあるが、フィクションの部分も多い。フィクションとして加工された箇所は、視聴者の願望（と制作者側が思っているもの）を反映している。すなわち、「朝ドラ」の規範を探る重要な手がかりとなる。特に、人間関係（姉妹関係、夫婦関係）を中心にフィクションとして加工された箇所についてみると、主人公の姉「はつ」の人生の強調（業績主義的ではない生き方、伝統的な女性の生き方、逆境の中で強くある生き方の肯定）、主人公の夫の「妾」の存在の消去（セクシュアリティにかんする描写の選択的排除）、などがあげられるであろう。

3.2.3. 『あさが来た』の「成長」観

社会的成功にむかって順調に前進していくあさを主人公にすえ、視聴者に満足感・安心感を

与えるとともに、主人公の姉はつ（ほぼ「フィクション」。逆境の中で信念をもって生きる）の人生を並行して描写することにより、業績主義的でない生き方、世俗的な成功とは別に「りんと」して生きる人生をも肯定している。たとえば、最終回「柔らかい心」における、姉妹が互いの人生をねぎらいあう会話——「(あさ) なあ、おねえちゃん。うちら、あの日、おとうはんおかあはんに言われたみたいに、お家守れましたんやろかな。」「(はつ) ええ。守れたと思います。」「(はつ) ようやったな。ようがんばりました。」「(あさ) おねえちゃんもな。」——が象徴的である。

3.3. 小括：「成功」に回収されない「成長物語」

『ひよっこ』『あさが来た』について、非偉人/偉人、実在のモデルなし/実在のモデルあり、という違いはあるが、両者ともに、家族や夫婦、同僚、友人といった周りの人々との関係を中心に主人公の成長が描かれているという点では共通していた。また、両作品において「成長」は、出世や偉業達成といった世俗的な「成功」とは必ずしもイコールではないものとして扱われる⁽¹³⁾。以上から、「朝ドラ」の提供する「成長物語」の規範として、「世俗的な『成功』とは異なる『ゴール』の設定、人間関係を通した主人公の内的成長の重視」が浮かび上がってくる。

一方で、視聴者は、「朝ドラ」が提示する「成長物語」をそのまま受容しているとは限らない。視聴者は、「朝ドラ」を実際にどう見ているのだろうか。次節では、「朝ドラ」の受容の様相を明らかにするために、首都圏の若い女性を対象に行ったグループ・インタビューを検討する。

4. グループ・インタビューの分析

まず、グループ・インタビューの概略について述べよう。グループ・インタビューの実施は、「放送文化基金助成『NHK 朝の連続テレビ小説における女性の表象と生き方のモデル—調査研究に基づく映像教材の作成—』（2018年4月1日～2019年3月31日、稲垣恭子代表）」のメンバーを中心に行われた。2019年1月26・27日、東京において、「朝ドラ」を習慣的に視聴している首都圏の若い女性（大学・専門学校生6名×1、30代周辺の社会人6名×2）を対象に、約100分のグループ・インタビュー×3を行った。インタビューの目的は、若い女性の「朝ドラ」視聴状況を探るというものである。モデレーター（株式会社NHK エデュケーション服部弘氏）の進行のもと、「ドラマへの嗜好性、朝ドラへの嗜好性」「印象に残ったシーン」「実生活とのかかわり」などのテーマについて自由に話すという形式で行った。また、インタビュー中に、『ひよっこ』『あさが来た』の1シーンを見せて感想を聞く時間を設けた。簡単なアンケートも実施した。

インタビュー対象者： 「朝ドラ」を習慣的に視聴している首都圏の若い女性。以下

の3グループ。

グループ1： 上京して首都圏で働いている30代周辺（26-34才）の社会人女性6名。
以下、「上京社」と略。

グループ2： 首都圏で育ち首都圏で働いている30代周辺（26-34才）の社会人女性
6名。以下、「首都圏社」と略。

グループ3： 上京して首都圏の大学・専門学校に通っている女性6名。以下、「上京
大専」と略。

以下、グループ・インタビューについて、「4.1. 『朝ドラ』視聴にはどういった特徴があるか」「4.2. 『ひよっこ』『あさが来た』はどう見られたか」に分けて検討していく。

4.1. 「朝ドラ」視聴にはどういった特徴があるか

グループ・インタビューからは、「朝から嫌な気分にはならないようなストーリー」「つまらなくてもみる」「時計代わりにみる」「とぼし見でもよい」というように、他のドラマ視聴とは異なる、「朝ドラ」特有の視聴目的や視聴形態が浮かび上がってきた。特に、グループ・インタビューでキーワードとなったものが、「ほっこり」（＝「朝ドラ」の魅力、「朝ドラ」に求めるもの）と「ながら」（＝「朝ドラ」の視聴形態）である。そこで、これら二つのキーワードに沿いつつ、インタビューについて整理・検討していく。

4.1.1. 「朝ドラ」の魅力、「朝ドラ」に求めるもの： 「ほっこり」

まず、「朝ドラ」の魅力、「朝ドラ」に求めるものについてインタビューで語られた内容をみよう。

<インタビューより>（下線引用者、以下同様）⁽¹⁴⁾

「……朝から嫌な気分にはならないようなストーリー」（上京社）

「朝ドラって割と、朝の忙しい時間にほっこりできるようなドラマ」（上京社）

「……ああいう泣くシーンは、朝やられるときついですね。メイクも崩れるし。」（首都圏社）

「……録画で見てるんですけど。なので逆に夜もう疲れきって帰ってきて見るって感じなので、他のドラマは週末に割と見るのでいろんなタイプがあって大丈夫なんですけど、朝ドラに関しては若い女の子が、結構頑張ってるみたいなストーリーが多いじゃないですか。それがすごい全く現実見てないことがあると腹が立つし、すごく打ちのめされるとしんどくなるしなので、適度に障害があって、適度に頑張ってる乗り越えてくれると1日の終わりに、私も頑張ろうって思って寝れるので。」（首都圏社）

「朝正直うつ展開になるとちょっと嫌になるんですけど、会社で朝ドラ見てる人が何人かいて、それでその人たちと会話するために朝ドラを見てるっていうところもあったりします。」（首都圏社）

「……普通の民放のドラマとかだったら面白くないと思った時点で多分見ないと思うんですけど、朝ドラに関してはつまらなくてもすごい真剣に見てる。……内容、テーマがそんなに面白くないなって思っても、ストーリーは絶対追ってくつていう。」(首都圏社)

「……(『ひよっこ』について、引用者) 朝だからこそ、急いでいる気持ちと違う、逆の、ゆったりした感じの雰囲気が落ち着かせるというか。」(上京大専)

インタビューからは、過度な感情移入(泣く、憤るなど)を要求されず、出勤・登校前の朝の気分を穏やかに明るくしてくれるようなものが好ましい「朝ドラ」として受け取られている(=「ほっこり」というキーワードでまとめられる)ことが明らかになった。

4.1.2. 「朝ドラ」の視聴形態：「ながら」

次に、「朝ドラ」の視聴形態についてインタビューで語られた内容を見よう。

<インタビューより>

「朝ドラは、実家にいるときによくついていたので、母と一緒に見ていました。」(上京社)

「……まず 15 分っていう短さなので見やすいっていうのと、ちょうど朝と昼と大体その日の回ってやると思うんですけど、朝出勤する前っていうのがちょうどいいというか、もちろんそれより早く出ちゃう方はあれですけど。ちょうどいい時間帯で、大体朝ドラを見たらテレビを消してそのまま出ていくっていう。それまでに支度をしておくっていうルーティーンが何となくできて、だから大体朝ドラが始まったらやばい出る準備っていう簡単なルーティーンがもうできてる存在かな。だから朝の始まり、ルールみたいな感じですね。……ながらですね。」(首都圏社)

「(うっかり見すぎて遅刻しそうになることについて、引用者) そうなんです。つい2、3日前見てて、ああ、やべえってなって。ちょっとバタバタしながら出たとか、あと『半分、青い。』とかのときの親友のうちの1人が亡くなっちゃうシーンとかはもう。」(首都圏社)

「朝ドラは2種類見方があって、すくなくながら見でもストーリー追えるような話だと、本当に朝の支度をしながら見て、時計代わりみたいな感じで見て楽しんだりとかして、あとはじっくり見たい、この中だと『あまちゃん』とかだと、本当にちゃんと見たいなというのがあるんで、逆にリアルタイムでは見ないで録画して帰ってゆっくり見るみたいな、1日何回も見みたいなのがあったりして。どっちも割と最初から最後まで見る人が多いんですけど、最近だと『まんぷく』とかも割とながら見でも見れて、そんなに1回見逃しちゃっても大丈夫かなっていう感じで。」(首都圏社)

「15 分っていうのもあるんですけど、集中力って15 分ぐらいしか持たないので、なので朝ドラは私にとってとても見やすいものだっていうふうに思うんですけども。」(首都圏社)

「……取りあえず内容は別として、必ず見るっていうふうになってて時計代わりじゃないんですけど、それが見終わってから着替えて出掛けるっていうのが自分の中で決まっ

ているので、8 時までに化粧と掃除と全部済ませてあと着替えるだけの状態にしといて、15 分間きっかり見て 15 分でつづくっていうの下に出てきた瞬間に着替え始めて。」（首都圏社）

「それこそながらだったの、ながらで作業しながらしてたら急にペンゲンって、すごい異常に発音がきれいなペンゲンが聞こえてきて、発音きれいって思って見たらあのきれいな顔でっていう感じだったんですよ。」（首都圏社）

「……おばあちゃんとかおじいちゃんがテレビずっと見てるんですけど、そしたら大体朝ドラ見てて。」（上京大専）

「……割りかしずっとテレビを一日中つけてる家だったので、ご飯のときもつけてたりとかっていう家だったんで、起きたらテレビがついてて。お母さんが朝ドラが好きで見てて、学校行く前に、特に別に流れてるものを見てるっていうだけだったんですけど。」（上京大専）

「基本ずっと NHK ついてるんで、勝手に流れてる。」（上京大専）

「……ずっとテレビがついてる家だったので。朝ってすごい、時間、分刻みで準備したりとか忙しいので、ずっと NHK がついてて。……みんなが家から出てった後に、1 人で朝ドラ見たり、お母さんが仕事じゃないときは一緒に見たりしてて。」（上京大専）

「……多分、土曜日とかデータ放送とか再放送とかでフォローしてて、なんとなく話を。あと母親との会話とかでストーリーがつかないで保つ感じで見てて。」（上京大専）

インタビューから、他のドラマ視聴と異なり、「朝ドラ」視聴には、「散漫な視聴」（ながら見、とぼし見、時計代わり、タイムキーピング）という特徴がある（＝「ながら」というキーワードでまとめられる）ことが示された。これは、稲垣・佐々木・伊藤・椎名・花田・服部（2017）の「朝ドラ」視聴にかんする質問紙調査の分析で、調査対象の若者の 78.3%が「ながら見」と回答していることとも符合する。

4.1.3. 小括： 「毎朝の儀礼」「毎朝の習慣」としての「朝ドラ」視聴

このように、視聴の仕方に注目すると、「朝ドラ」は、朝の気分をもちたてる心地よい BGM のような存在であり、「散漫な視聴」が行われていることがわかる。そのため、過度な感情移入や関心を動員するシーンは、「朝ドラ」としてはふさわしくないと認識されている。「朝ドラ」は、現代の若い女性にとって、登校・出勤前に身づくろいをするような「毎朝の儀礼」「毎朝の習慣」となっている⁽¹⁵⁾といえよう。

4.2. 『ひよっこ』『あさが来た』はどう見られたか

次に、「朝ドラ」が提供する「成長物語」を、若い女性の視聴者はどのように見ているのか、そもそもどういったところに主人公の「成長」を感じて（感じないで）見ているのか、主人公の人生や成長について自分と照らし合わせて見ているのか（見ていないのか）、ということについて、考えたい。

そこで、『ひよっこ』『あさが来た』について、インタビュー内容を、「A. 作品全体について」、「B. ロール・モデルとして」、「C. 成長について」の3つに分類し整理・検討する（インタビュー内容が中心だが、アンケートの意見も補足的に使用）⁽¹⁶⁾。以下、順番が実際の放送順とは逆になるが、「3. 『ひよっこ』『あさが来た』の描写の特徴」の順番とあわせて、『ひよっこ』、そして次に、『あさが来た』について検討する。

4.2.1. 『ひよっこ』について

まず、『ひよっこ』についてインタビューで語られた内容をみよう。

<インタビューより>

A. 作品全体について

「ほんわかしてて、みんなが性格とかキャラクターというのが憎めない、かわいらしい感じが見ていて安心して。朝からグスグスしたりしたくないので、よかったなって思います。」（上京社）

「……今みたいなデジタル感なくて、ちょっと全体的にゆったりしてる感じが感じられるのと、洋食屋とかよく出てきた、あんまり覚えてないんですけど、そこにお給料、出たら月に1回、ご褒美でこれ食べに行こうみたいなこと言ってるのも可愛いなみたいな、ほっこりする、そういう雰囲気があったかなと思うんですけど。」（上京社）

「……ヒロインの前向きさ、前向きなんだけど、皆さんおっしゃってたように穏やかな雰囲気もあるので、そこがすごい好きでした。」（上京社）

「……仕事を譲ってあげる場面がすごい覚えてます。あとは洋食屋さんで最初は慣れないけど、だんだん生き生きと働いてる姿が印象に残ってます。」（上京社）

「……『ひよっこ』って、そんなに大事件みたいなものはなかったって覚えてて。……ずっと有村架純ぐらいの年齢の話がほぼ8割、9割ぐらいだったので、本当にゆっくり、ただ日常が流れてるような感じを、ただ見てるみたいな。」（上京大専）

「全体の家族とかの雰囲気とか、茨城のゆったりした感じとかと、見ててなごやかになるっていうか。そういう感じの雰囲気が、すごい好きでした。」（上京大専）

「古き良き昭和を見れてる感じが好き。時代を、それも有村架純っていう、自分たちと同じような世代の女の子が、……朝、頑張ろうって言ってばって出るっていう感じっていうか。そういう感じで見てました。」（上京大専）

「……昔は3世帯とかそういう家族の絆と、地域……つながりがあるっていうところがすごくいいなあって。田舎行くと、結構、今もそういう残ってるんですけど、東京行くとそういうのが全くないので。そういうのをテレビの中で見て、気持ちがほっこりするっていうか。」（上京大専）

B. ロール・モデルとして

「……全然、自分に当てはめては考えないですね。ただ、ああいうほんわかしてかわいら

しいのを見ていただいだけであって、私もなりたいたか、やってみようとかは考えないです。」（上京社）

「私は、割となりたいなと思って、なろうと思っても途中で挫折します。」（上京社）

「……仕事とかもなかなか、働いてても、その働いてた所がなくなっちゃう、倒産しちゃうとか、そういう中でも前向きに頑張っている主人公がすごくすてきだなんて思いました。……自分が仕事してて倒産しちゃったってなったら、あんなに前向きになれるかなっていう。」（上京社）

「……割と仕事、頑張ってるなってような話の内容が入ってると、こっちもやる気になるというか、やっぱり働いてる人って生き生きしてるんだなとか、そんな感じに思えるから、描かれてるのはいいことかな」（上京社）

「……楽しくやってるなって感じがすごでしたので。特に洋食屋さんのところは、だからといって洋食屋さんで働きたいとかは思わないんですけど、気分的には良くなる。」（上京社）

「（自分と重ねるのは、引用者）……みね子が働いて給料日のときに何か揚げ物を食べていたと思うんですけど、それが自分へのご褒美ってところで、私も給料日には自分へのご褒美をしてる、てところですかね。」（上京社）

「『あさが来た』と比べて、引用者）……『ひよっこ』は家族愛に向けているけど、その中で私たちに近いような働き方をしているところの差を、『ひよっこ』を見たときに感じました。」（上京社）

「朝ドラって割と、朝の忙しい時間にほっこりできるようなドラマだから、割とすごい偉人の人を見るっていうよりか、親しみあって頑張れるような気になれる人のほうが見やすいのかなと個人的には思ってた、それで選んでました、見る作品を。」（上京社）

「（自分の寮暮らしとは違うが、あかね荘の生活が、引用者）うらやましいです。つらいときになんでも言えそうで、いいなあって思ってます。」（上京大専）

「東京に出てくる物語が多いので、面白いです。……（自分と重ね合わせるかという問いには、引用者）ううん。」（上京大専）

「何かを成し遂げた人の人生には、自分はないってというか、遠い感じがするけど、そもそも朝ドラの人って大概、そんな根性が腐ってるような人とかじゃなくて、根が真面目とか一生懸命とか前向きとかな感じだから、その人が頑張ってるのを、『ひよっこ』に関しては割と普通の人というか、そういう人が真っすぐ前を見て頑張っている姿を見たら、自分も頑張ろうかなってのをすごい思えます。」（上京大専）

「みね子が倒産をきっかけに、自分の就職話を友人に譲るシーン（が印象に残っている。引用者）。自分だったらできないと思うし、すごいと思いました。」（アンケートより（首都圏社））

C. 成長について

C-1. 主人公がエリート大学生のプロポーズをことわるシーンをみせての感想として

「私はみね子の家族愛の深さを再確認できたところと、あと縁談を断ってでもみね子と一緒にになりたいって言ったのに、あの数時間後にはそういう結論に、その一話の中でこんなにも物語が動くというか、人の気持ちって変わるんだなっていうようなところですね。本当に好きなら、先ほども意見あったと思うんですけど、落としどころはなかったのかなっていうところは、すごいモヤッしました。」(上京社)

「……成長とか跳躍への一歩みたいな。」(上京社)

「……成長の一歩の、一つのハードルなのかなってぐらいにしか思わない。」(上京社)

「挫折があつての成長かなみたいな感じですよ。」(上京社)

「一言でいうと気付きのシーンっていうか。……全然、違う人がいるってことに気付いたとか、格差社会をまざまざと分かったようなシーンっていうか、……みね子はお金持ちと貧乏は違う、家族との関わり方も違うってのを気付いたんじゃないかなって思いました。」(上京社)

「……もうちょっと何かあつたんじゃないかな。解決法じゃないですけど、他にも方法というか言い方というか」(上京大専)

「……家族とかお金とか、そういうののみね子の価値観が知れたというか。どこに重きを置いてるかっていうののメッセージ性を感じました。」(上京大専)

「私的には成長というか。一緒についていくか、自分の考えとか自分の持つてゐる意志を貫くかどっちかっていう選択肢があつたと思うんですよ。みね子の性格的にも自分を貫いたというか、本当に正しいと思つてゐる選択がちゃんと自分の意思でできたっていうところは、成長なんじゃないかなって思います。」(上京大専)

「一番大事にしてゐる家族っていうのと、あとお金の大切さを東京に来て知つたと思うので、そういう面ではみね子が自分らしく流されないでちゃんと断れたっていうのはプラスだったのかなと思います。」(上京大専)

C-2. ストーリー全体に対する感想として

「私はあかね荘の、寮の仲間たちとのシーンと、あと工場での仕事で失敗だらけだったところと、あとは洋食屋さんで働いてどんどんみね子が仕事ができるようになっていくシーンが印象的です。」(上京大専)

「私は洋食屋で働けることになって、その中で成長してく姿と、あと、あかね荘のみんなと。……みんなとわいわいしてるところは見ててこっちも楽しくなるなっていうので印象に残ってます。」(上京大専)

インタビューからは、「ゆったり」「ほっこり」といった表現で、家族愛・地域愛がテーマのおだやかで優しいストーリーを好意的に受け止めている様子がわかる。特に、「普通の人」である主人公の「成長」(大事件ではなく、主人公の人生における重要な選択において自身の価値観

を明確にし意志を貫く、など）を評価しているのがみてとれる。ロール・モデルとしては、主人公の頑張りに励まされるという意見もある一方、ただ鑑賞しているだけで自分と重ね合わせるわけではないという意見もある。

4.2.2. 『あさが来た』について

次に、『あさが来た』についてインタビューで語られた内容をみよう。

<インタビューより>

A. 作品全体について

「私は、まず時代が江戸から始まるじゃないですか。江戸時代、幕末から始まるので、それが今までの朝ドラではあんまりなかったなっていうふうに思いました。」（首都圏社）

「……私もすごい五代ロスになって、その日の仕事一日本当にブルーで。でもそういうのって、今までの朝ドラでそういう人っていなかったなあって思って。」（首都圏社）

「だから、あんまり英語が出てくる瞬間ってのが、結構久々だったので。そういうのもあってちょっと別な感覚でした。」（首都圏社）

「五代さんも良かったですけど、私は結構、玉木宏さんが演じる新次郎さんが顔がドタイプだったんで。それにウキウキしてました。」（首都圏社）

「今以上にそういう女性が働くとか、こういう朝ドラの幕末だったり昭和の時代とかは、……今以上に大変なんだなって思うと、すごくまだ今の時代は割と女性進出はしてきてはいるので、昔はもっと大変だったんだろうなあとと思うと、そういう考え方とかすごい勉強になるなと思いつつ見てます。」（首都圏社）

B. ロール・モデルとして

「別に、実在する人だからといってそのドラマへの見方が……スタンスが一番、……変わることはないです、あんまり。」（上京社）

「でも実在してもしなくても、ドラマはドラマで大きいくくりではフィクションなので、別に見方はそんなに変わらないですけど、実在する場合は参考文献がいっぱいあるので、私は結構、読んだりして、次、あいつが出てくるかもとか。」（上京社）

「……共感しやすいのは『ひよっこ』で、自分に近いなっているのがあるんですけど、憧れ度でいったら『あさが来た』のほうが大いいかなって思います。」（上京社）

「女性だからあんまり、先陣切って経営をするとかそういうことなく、でも、あさは性格的に経営のほうとかにも回っていったので、そういう男女差別じゃないけど、そういう男女差を越えた話で懂れました。……勇気付けられるのはあるんですけど、今の自分の生活からはちょっと程遠いとは思ってしまいます。」（上京社）

「自分とは違う考え方の人が出てくるので、……その違いを見て、自分自身の感じてないことに対しての情報が得られるので、それはすごく自分得なのかなっていう見方はします。」（上京社）

「(自分の仕事との関係は、引用者) 特にないです。全然ないです。」(上京社)

「その両替屋から銀行って、私も銀行で仕事をしているので、銀行っていうのはそもそものシーンで、銀行業で一番お金より大事なものは何だと思えますかみたいな質問のシーンで、『信用』って言って答えるシーンがあるんですけど、すごい自分の仕事に直結しているので、そういう歴史の下で銀行っていうその商売っていうのが成り立ってるんだってのを、改めて考えさせられたなっていうのは、自分個人的なあれなんですけども。そういう背景があるんで、実際に他の作品とそこが違ったので結構すごい覚えてるんですけど。」(首都圏社)

「……女性が前に出ていってストーリーが、あさを見習わなきゃいけないなていう元氣をもらえる。へこたれてちゃいけないなて思えるのが良かったなと。」(首都圏社)

「頑張りうっていうか、あそこまでできないなとか。」(首都圏社)

「あさって、絶対にへこたれないっていうか、すごい前向きな性格なヒロインだったので。一途だしそういうのはすごい大事だなんて思いました。……(一方、自身の仕事にかんしては、引用者)そこはどうでしょうね。でも、周りのチームでやってる仕事なので、周りの意見も聞かないとっていう部分はありますけど。」(首都圏社)

「……(新次郎について、引用者) こういうふうにちょっとメンターのレベルで見てくれて、いいところでほぐしてくれる人がいるってすてきだなと思うんですけど、現実にそういうふうにされたら絶対ピシャッとはね付けるだろうなっていうふうには、自分自身はっていうのは分かっているが憧れるっていう回想シーンでした。」(首都圏社)

C. 成長について

C-1. 妻をとるかどうかをめぐって夫婦が悩むシーンをみせての感想として

「……結局お互いが、きっかけは結果あさがつくったんですけど、本当の気持ちよりも世間体を気にしたことによって生まれてしまったそのもの……」(首都圏社)

「……人間関係は夫婦に限らずなんですけど、深めてく上で何かしらトラブルっていうか、問題が起きたほうが、問題が起きて解決したことによって深まってくっていう部分があると思うので、一つの関門を突破したじゃないですけど、深めていく上では大切なのかっていうふうに思いました。」(首都圏社)

C-2. ストーリー全体に対する感想として

「みんなに結構反対されて、それでも自分を信じてやることかすごい。」(首都圏社)

「姉はつの人生について、引用者)……比較してどっちが幸せなのかみたいな、そういうそれぞれの生き方っていうのをまた違ったストーリーがあるのは、そっちも楽しめて好きだなあとか思う。」(首都圏社)

「自分のためではなく、世の中のために、会社を作ったり学校を作るシーン (が印象に残っている。引用者)」(アンケートより (上京社))

インタビューからは、主人公の仕事について、一途さ、前向きさ、チャレンジ精神など、具体的な仕事内容より、仕事にむかう態度や心構えを評価する傾向がみてとれる。五代や新次郎など、主人公を支える周りの人々の魅力は、視聴をすすめる大きな牽引力になっている。また、自分のためではなく世の中のために仕事をする点や、夫婦の人間関係の深まりに成長をみている。ドラマの中で、姉「はつ」が示す伝統的な女性の生き方は、主人公とは別の生き方として肯定されている。ロール・モデルとしては、社会人として自身の仕事とひきつけてみる関心や主人公の姿勢を参考にするという意見もあるが、懂れるがそこまでできないといういくぶん距離をおいた見方もとられている。

4.2.3. 小括： 「成長物語」への適度な没入

グループ・インタビューから、視聴者は、人間関係をとおした主人公の内面的成長を評価しており、その際、視聴者は、大事件ではなく、小さな事件や繊細なディテールに成長の兆しをよみとっている⁽¹⁷⁾、ということが明らかになった。また、「非偉人」/「偉人」、実在のモデルなし/実在のモデルあり、という内容面の対照性は、(親しみやすさなどに関係する場合もあるが、そもそもフィクションであるという意味では同じという意見もあり) 共感の仕方にそれほど決定的な差異を生んではいなかった。二つの作品にかんするインタビューからは、視聴者は、「朝ドラ」の提供する「成長物語」を受けとめつつ、ロール・モデルとしては、適度に距離をおく態度をとっているということが明らかになった。

5. 成長なき時代の「成長物語」とは

分析で得られた知見について、ビルドゥングスロマンとの比較を補助線にしつつ、再度検討する。その際、「朝ドラ」の内容にかかわる分析から得られた知見(「5. 1. 『本来の』ビルドゥングスロマンへの回帰」と、「朝ドラ」の受容にかかわる分析から得られた知見(「5. 2. 『成長物語』の非啓蒙的受容」)との二つにわけて述べる。

5.1. 「本来の」ビルドゥングスロマンへの回帰

『ひよっこ』『あさが来た』の内容の分析からは、世俗的成功とは異なる、人間関係や試練をとおした主人公の内面的成長こそが「ゴール」として重視されていることが分かった。また、両作品ともに、主人公の成長の過程を描写するにあたって、人間関係に重点をおいている。近代日本におけるビルドゥングスロマン(ととらえられるもの)は、しばしば、立身出世などの大きな物語と合体して存在してきた。しかし、そうした大きな物語が訴求力を失う中で、現代日本社会のビルドゥングスロマン(ととらえられるもの)は、「本来の」、あるいは、よりピュアなビルドゥングスロマン⁽¹⁸⁾(周りの人間関係をとおした主人公の内面的成長の物語)へと回帰しているといえるのではないだろうか。

5.2. 「成長物語」の非啓蒙的受容

一方で、若い女性を対象にしたグループ・インタビューの分析から、視聴者は、「朝ドラ」の提供する「成長物語」を、適度な距離を置いて非没入的に見ていることが明らかになった。そうした非没入性は、視聴の仕方の特徴（「散漫な視聴」）とも関係している。本来のビルドゥングスロマンそのものがもっていた啓蒙的性格⁽¹⁹⁾や、（少なくとも表向きには行われていたはずの）啓蒙的受容⁽²⁰⁾とは異なり、「朝ドラ」の提供する「成長物語」は、非啓蒙的に受容⁽²¹⁾されていることがわかる。

以上のように、本稿では、2010年代の「朝ドラ」作品の内容と受容にかんする分析をもとに、『『本来の』ビルドゥングスロマンへの回帰』『成長物語』の非啓蒙的受容』という二つの特徴を抽出した。こうした特徴は、近年の日本社会における、業績主義的価値観や業績主義的行動様式の訴求力低下（森田他 2004: 375）とも連動していると考えられる。ポスト近代社会にふさわしい新たな「成長の書式」（大塚 2005: 309）が模索される現代において、「朝ドラ」は、今後も、「成長」とは何かという問いを探る上で重要な示唆を与える分析材料の一つとなるであろう。

※ 本稿は、放送文化基金助成「NHK 朝の連続テレビ小説における女性の表象と生き方のモデル—調査研究に基づく映像教材の作成—」（2018年4月1日～2019年3月31日、稲垣恭子代表）、JSPS 科研費 19K21761（挑戦的研究〔萌芽〕）「ビルドゥングスロマンと『女性の生き方』の表象に関する比較文化社会学研究」（2019年6月28日～2022年3月31日、稲垣恭子代表）の研究の一貫として行われたものである。また、グループ・インタビューにおいては、株式会社NHK エデュケーション・服部弘氏に御協力いただいた。

<注>

1 「連続テレビ小説」は、1961年に放送が開始されるが、『おはなはん』（1966年）で、「女の一代記」路線を確立したといわれる（黄 2014: 55）。『おはなはん』は、以後の「朝ドラ」に繰り返し現れる「おてんばなヒロイン」「たくましく生きていくヒロイン」の原型をつくった（黄 2014: 27-60）。

2 「朝ドラ」では、自立・成長をめぐって、仕事と家庭の間で揺れる主人公がしばしば描かれる。黄の時系列的分析などが参考になる（黄 2014: 243-4）。

3 本稿の分析は、放送文化基金助成「NHK 朝の連続テレビ小説における女性の表象と生き方のモデル—調査研究に基づく映像教材の作成—」（2018年4月1日～2019年3月31日、稲垣恭子代表）、JSPS 科研費 19K21761（挑戦的研究〔萌芽〕）「ビルドゥングスロマンと『女性の生き方』の表象に関する比較文化社会学研究」（2019年6月28日～2022年3月31日、稲垣恭子代

表)の研究の一貫として行われたものである。特に、本稿は、稲垣・竹内・濱・佐々木・花田・椎名(2019)、および、稲垣・竹内・濱・井上・佐々木・花田・椎名(2019)の両発表をもとに、竹内が単独で分析を担当した箇所について、修正・発展したものである。学会発表での竹内以外の研究者による分析については、重要な知見を含むものであるが、本稿では略している。

4 ビルドゥングスロマンの定義については、たとえば、以下のような、柏原兵三の引用によるW. デルタイの定義を参照。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』に代表される、一般にビルドゥングスロマンとして理解されている作品に対する、一つの古典的な定義といえる。「青年は幸福な薄明のうちに人生に踏み入り、自分に近い魂を求めて、友情と恋愛に遭遇する。だがいまや世間のきびしい現実と闘うようになり、そしてさまざまな生活経験を経て成熟し、自分自身を見だし、世界における自分の使命を確信するようになる。」(柏原 1978: 62)。また、一方で、柏原は、『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』はそもそもビルドゥングスロマンとはいえないというクルト・マイによる批判も紹介している(柏原 1978: 107)。

5 稲垣・佐々木・伊藤・椎名・花田・服部(2017)によれば、1990年代以降、視聴率が低下し始め、2000年代には20%を切るようになるが、2010年代に視聴率がゆるやかに回復を始める。

6 『あさが来た』の平均視聴率は23.5%、『ひよっこ』の平均視聴率は20.4%。ビデオリサーチ社による。

7 社会関係資本の観点からの分析については、稲垣・竹内・濱・井上・佐々木・花田・椎名(2019)では井上慧真が担当している。本稿では省略した。

8 社会人女性にとっての「朝ドラ」のウォーミングアップ機能については、稲垣・竹内・濱・井上・佐々木・花田・椎名(2019)では濱貴子が担当している。本稿では省略した。

9 稲垣(2017)は、『あまちゃん』について、現代における「武者修行」の物語として分析を行っている。

10 「Topic 高度成長期が舞台 NHK 朝ドラ『ひよっこ』 名もなき人たちの群像劇『日経MJ(流通新聞)』2017年7月21日。

11 実際の五代友厚と広岡浅子の交流についてはほとんど記録がないため、ドラマで描かれる二人の関係性はあくまでフィクションである。

12 たとえば、「加野屋にはあなたというファースト・ペンギンがいた」(第54回「炭鉱の光」より)というセリフで五代があさを励ますシーンなど。

13 『あさが来た』においては、主人公はいわゆる「偉業」を達成した「偉人」であるが、姉はつ(ほぼ「フィクション」)の人生を並行して描くことにより、規範の不足分を補完していると考えられる。

14 以下、インタビューの引用については、インタビュー時の会話にしたがってそのまま文字にしているため文法的に間違っている箇所もあるが、臨場感を伝えるため、ほとんどそのままにした。「……」は、略した箇所である。

15 これにかんして、本稿では省略しているが、稲垣・竹内・濱・井上・佐々木・花田・椎名(2019)では、濱がウォーミングアップ機能として詳細に分析している。

16 『ひよっこ』については、「上京社」と「上京大専」のインタビューを中心に使用している。

「首都圏社」は、『ひよっこ』については、ほぼアンケートのみのため基本的に略している。『あさが来た』については、「上京社」と「首都圏社」のインタビューを中心に使用している。「上京大専」は、『あさが来た』については、ほぼアンケートのみのため基本的に略している。両作品とも、インタビューで語られた内容を中心に使用し、アンケートについては補足的に用いたのみである。

17 たとえば、インタビューにおいて、「朝ドラ」の他の作品に話が及んだ際の以下のような発言も参照。『べっぴんさん』がすごい好きだったんですけど、あれはもう戦争で結構その辺はつらいところもあるんですけども、きれいなものを作ろうって、赤ちゃんにいいものあげようみたいなのですごく前向きだし、その中で頑張っていってるのが、手元に向かってるっていうのがすごく好きで、広いところを見てるっていうよりここを見てこうっていうのが、すごく自分にもなんとなくできそうな気がしてうれしい……はがきを作ったりとかしてあげてるっていうのが好きでした。」（首都圏社）（下線引用者）。

18 たとえば、以下参照。『ヴィルヘルム・マイスターの修業時代』執筆途中、ゲーテは作品構想を変更し、主人公の成長のゴールを芸術家（≡偉業達成）ではなく、「一箇の市民」とする選択を行っている（柏原 1978：78）。また、第6巻の「美しい魂の告白」において、社会と隔絶した内閉的な自己形成は、乗り越えるべきものとして否定され（「美しい魂」という表現はアイロニカルに用いられている）、それに代わって、「社会に開かれた自己形成」こそが真の自己形成であると位置づけられている（柏原 1978：96）。

19 柏原（1978：61）、登張正実（1964：3-4）など参照。

20 たとえば、以下を参照。「B ロマンを読むことは先達の人生を、文字を通して疑似追体験することでした。」（宮澤 2015：1）。

21 ここでは省略したが、稲垣・竹内・濱・井上・佐々木・花田・椎名（2019）において、濱は、「成長物語」の若い女性による非啓蒙的受容を、『温める』文化の創出」として、加熱/冷却分析軸の転換という視点から秀逸な分析を行っている。

<文献>

黄馨儀，2014，『メディアの女性文化： テレビドラマにおける女性表象とその社会的意義——NHK 朝の連続テレビ小説を例に——』同志社大学大学院社会学研究科博士学位論文。

稲垣恭子，2017，「4 変容する家族の物語」『教育文化の社会学』放送大学教育振興会，53-65。

稲垣・佐々木基裕・伊藤すみれ・椎名健人・花田史彦・服部弘，2017，「現代若者におけるNHK『連続テレビ小説』の受容—視聴者アンケートの分析を中心に—」，日本教育社会学会第69回大会，於一橋大学，2017年10月21日。

稲垣・竹内里欧・濱貴子・佐々木・花田・椎名，2019，「現代日本の若者にとって『朝ドラ』とは何か？——質問紙調査及びインタビュー調査から——」，中国文化大学日本語学科・京都大学教育学研究科共催シンポジウム「越境する『朝ドラ』——その過去・現在・

- 未来——（「越境的『晨間劇』：晨間劇的過去，現在與未來」），於中国文化大学，2019年3月23日。
- 稲垣・竹内・濱・井上慧真・佐々木・花田・椎名，2019，「ポスト近代社会における『成長物語』——『連続テレビ小説』を手掛かりに——」，日本教育社会学会第71回大会，於大正大学，2019年9月12日。
- 柏原兵三，1978，「ドイツ教養小説の系譜」しんせい会編集『教養小説の展望と諸相』三修社，59-118。
- 宮澤康人，2015，「ビルドゥングスロマン（自己形成小説）と教育学の対立と交錯—『物語を愉しむ会』を続けてきて気づいたこと—」，教育哲学会第58回大会，於奈良女子大学，2015年10月11日。
- 森田洋司他，2004，「業績主義と男らしさのゆらぎ——マスキュリティ研究の最前線——」『教育社会学研究』74：375-7。
- 二瓶瓦，2016，「連続テレビ小説『あさが来た』はどのように見られたか～視聴者調査から見た特徴と成功の要因～」『放送研究と調査』9：2-25。
- 岡田恵和，2017，「連続テレビ小説ひよっこ 脚本岡田恵和 スペシャルメッセージ！」NHKサービスセンター編『ステラ MOOK 連続テレビ小説ひよっこ メモリアルブック』NHKサービスセンター，104-5。
- 大塚英志，2005，「教養小説のない時代を子供たちが生きていることについて」『週刊朝日別冊小説トリッパー 2005年春季号』，299-309。
- 登張正実，1964，『ドイツ教養小説の成立』弘文堂。